

ような赤から、冬のほとんど黒にか
かい紺青まで、色彩が織り成すあ
ゆる色を見せてくれます。又、秋か
ら冬の夜の海に広がる漁り火には、
胸が締め付けられるほどの切なさ
と華やかさがあります。

海を背景にした勿来の関の四季
折々の風情のなかで、一番すばらし
いのはやはり桜の季節です。

ご存知のように里桜は先ず花が咲
き、落花の後に若葉となつてゆきま
すが、山桜は赤褐色の新葉と白色の
五弁の花が同時に開きます。里桜に
は明朗な華やかさがあり、山桜には
清楚で、しっとりとした上品さがあ
ります。山道などで、緑の木々の中
でひっそりと咲いている山桜の、凜
とした美しさに出会ったときの驚き
は、また格別です。

春。今年もまた、新入生が桜花の
校門をくぐる季節となりました。彼
等のすべてが、なにかしらの期待と
夢を持って入学してくるわけですが
周辺校と言われる学校には、それな
りの悩みがあります。彼等の高校生
活の目的が非常に多様であり、その
対応に我々教師は非常に苦慮してい
るわけです。無事に卒業してほしい
という低次元の問題から、就職・進
学に及ぶ高次元までのことにまで関
わつてゆくという難しさです。進学
校のように生徒の目的が一樣ではな

いところに、たいへんさと面白さが
あるのかもしれない。

我々にとって、桜の季節は卒業と
いう別れの後にくる心躍る出会いの
季節でもあります。また、学校とい
うのは別れの日に向かつて毎日あく
せくと心を悩ましている小集団のち
っぽけな世界でもあるわけです。そ
して、来年こそもつとすばらしい桜
に出会いたいと思いがら頑張つて
いる世界でもあります。でも、そん
なちっぽけな世界が、とてつもなく
素晴らしいと思うことがあります。

(県立勿来高等学校教諭)

桜の花の散る頃に

関場 弘子



「先生、木曜日の男が来たよ。」

同じ病室の患者が言った。

かなり前のこと、私がアキレス腱
断裂で入院していた頃のことであつ
た。「木曜日の男」というのは、もう

既に卒業していたが、私のクラスの
生徒のこと。彼は白血病を患い、毎
週木曜日に通院加療をしていた。同
じ病室ということもあり、たびたび
私の病室を訪れてくれたのだ。

「先生、今日、バナナのうまそうな
のがあったから買って来た。食べて
ナイ。」

「先生、この本、なかなか面白いか
ら、先生も読んでみないかい。」

「先生、この前、こんなことがあつ
たんだよ。」などと、差し入れや情報
を提供してくれた。

彼が中学校の卒業式を迎えた日、
式場から出てくる彼の目は、涙でう
るんでいた。

卒業文集に、彼は、次のように綴
った。

「一年前は、病気のことで頭がいっ
ぱいだだったので、気持ちの整理が
つかなかつた。しかし、いろいろ考
えた結果、もう一年がんばろうと決
めた。」

彼は彼なりに考え、結果を出した。
再修を希望し、再び三年生として、
私のクラスに入ってきたのだつた。

しかし、病気が病気で、思うよう
に学校生活を送れなかつた。体格が
よかつたので柔道部に所属していた
が、ほとんど練習できず、体育館の
隅で友達の練習を見ていた。そんな
彼の背から、一緒に運動できない悔

しさを必死にこらえているのが感じ
とられた。同級生や私の励ましの言
葉も空しく、彼の力になりきれない
もどかしさのみが残つた。

体調が良い時には、病氣のことを
忘れ、見学をしているはずの柔道を
やつたり、友達と跳び回つたり……
ということもあつた。

「あの時、無理をしなければよかつ
た。あの時の母の苦勞を考えると涙
が出てくる。」と綴っている。

「泣きたい時、死を考えた時であつ
た。それを乗り越えた今、よりよい
社会人になりたいと思う。人生は長
いから、一年くらいどうにでも
なるだろう。体さえ健康ならば
……。」と結んでいる。

白血病との闘いの中で、彼は卒業
を迎えた。自分の意志で再修を希望
し、晴れて卒業を迎えたこの感動が
涙となつたのだろう。

卒業後、彼は地元の工場に就職し
た。終日勤務は無理ということで、
工場長の深い理解のもとに、彼独自
の勤務時間により仕事を精を出し
た。そして、毎週木曜日の通院加療
を続けた。

桜の花が散る頃、彼は十九歳とい
う若さで逝つてしまった。

この頃になると、私は決まって「木
曜日の男」を思い出すのである。

(国体局競技式典課)